



## Interview

医療法人社団 厚済会 会長  
上大岡仁正クリニック 院長

# 大西 俊正 先生

## Profile

1945年生まれ。香川県三豊市出身。  
子どもの頃は腕白坊主で野球やテニスに打ち込む。高校卒業後は、横浜市立大学医学部に進学。医師として学ぶうちに、大きなやりがいを感じるようになり、医学の基本である内科に惹かれ、高血圧や腎臓循環器を中心とした医局へ進む。

神奈川県立成人病センター（現・神奈川県立がんセンター）での勤務を経て、横浜市立大学病院にて透析室の立ち上げに携わって以降、透析治療を専門に行う。

1980年に上大岡仁正クリニックを開業。現在はクリニック4施設、入院設備を備えた病院を1施設運営している。

## 厚済会設立の経緯

大西会長は、横浜市立大学医学部を卒業後、横浜市立大学病院に研修医として入職。最初に受け持った患者さんが慢性腎不全の重症の方で、それが腎臓専門医としてのきっかけになったという。

「私は1971年に医局入りをしたのですが、そこで大学病院での透析室の立ち上げに関わることになり、その1年後に人工透析の機器が2台導入されました。当時は人工透析があまり普及しておらず、現在の主流である血液透析ではなく、腹膜透析が主流で、1クール8時間もかかるため、患者さんの負担が大きく医者もつききりでの診察でした。」

この機械を使用した治療の選定基準は、糖尿病・50歳以上の高齢・ガン患者は受けられないという、比較的元気な人しか受けられない狭き門だった。当時はその選定基準に加え、医療費が高額であり、家売って資金にする方もいたほど。限られた人しか受けられない治療であった。

1972年、人工透析が保険適用になったことで、患者さんの経済的負担が大幅に軽減され、透析医療が一般的に普及していくきっかけとなった。透析機器が徐々に病院に導入され、透析患者さんの受け入れも進んでいったが、十分な透析設備はまだ整っていなかった。



「そこで私は、対応しきれない透析患者さんの受け皿が必要であると感じ、1980年に一念発起して上大岡に人工透析のクリニックを開業しました。患者さんの生活に密着し、且つ、高いレベルの透析医療を提供するため、駅から徒歩5分以内という立地と、透析医療が充足していない地域という条件の下、上大岡という土地を選びました。横浜市立大学病院や聖隷横浜病院、済生会横浜市南部病院との密接な連携もあり、高いクオリティの透析医療が受けられるクリニックに成長しました。その後、上大岡を拠点とし、京急沿線の金沢八景・金沢文庫・追浜にクリニックを創設しました。」



クリニックでの透析治療を行う中で、合併症を発症した患者さんの受け入れ病院が近隣になく、鶴ヶ峰に厚済会旭病院を開院。駅から5分以内、入院患者用100床、透析ベッドが40床であった。大学病院と変わらない治療を提供していたが、旭病院は遠方であったため、厚済会の患者さんの通院が困難という不満もあり、より近くで通いやすいようにと、港南中央に横浜じんせい病院を開院した。

「当初、人工透析の患者受け入れの対象者は、自立して通える方、仕事をしている方を優先としていました。現在は、ガン・高齢・精神疾患などにも受け入れ対象者を拡大しています。また、自立通院が困難な人向けに無料送迎サービスも開始しました。」

厚済会は、設立当初の「地域に密着した真心の医療」という理想の下、透析クリニックの設立から、在宅治療が困難な方への療養病院の開院など、患者さんの生活環境や病状に寄り添い、地域に根差した医療機関を目指している。また、日進月歩で進歩している医学の最前線の治療を提供するために、大学病院の臨床の現場と交流を図りながら、これからも医療の質の向上に積極的に取り組んでいく所存だ。

## 厚済会の理念について

「患者さんを検査データのみで容易に判断することなく、患者さんの訴えの裏にあるものを謙虚に探すこと。それだけでなく、向上心を持って自らの医療知識をもっと増やそうとする謙虚さなど、すべてにおいて『謙虚さ』が素晴らしい医療者になるための最も大切な資質であると考えています。『自分が患者さんであれば、どのような医療を求めらるだろうか』と常に自問を続け、患者さんから『診てもらって良かった』と思って頂ける医療法人でありたいと思っています。」



## 40周年を迎えて、今後の展望

「患者さんの不安を解消していくことを第一に考えています。送迎や入院治療をできる限り叶え、少しでも負担なく治療を受けてもらいたいと思っています。40周年を迎えた後も奢ることなく、常に謙虚な気持ちをもって、何よりも患者さんが安心して受診してもらえる医療機関を目指し、職員一同努力を続けてまいります。」

また、透析治療が必要にならないようにする予防も大切ですので、健康診断や一般外来での生活習慣病診断にも力を入れていきたいと思っています。」